**今右衛門（いまえもん）窯と美術館**

今右衛門家は、長きにわたり鍋島（なべしま）焼を作り続けてきたことで知られている。佐賀（さが）藩主・鍋島家にちなんで名付けられたこの磁器様式は、江戸（えど）時代（1603～1867）に日本で作られた磁器の中で最も品質が高いものと考えられている。主に将軍への献上品として生産され、その生産方法は門外不出にされていた。今右衛門窯は、用意された磁器に釉上彩（上絵付（うわえつけ）または赤絵（あかえ）と呼ばれる）を施すことだけを担っていた。

赤絵（あかえ）町の地区にあり、現在は展示室と今右衛門窯本家が入っているこの建物は、1828年に起きた文政の大火（ぶんせいのたいか）の後、1830年に再建されたものである。建設から190年の歴史を持つ建物には、現代に合わせて電気の配線や水道管が備えられているものの、その他の部分は建設当時のままであり、今右衛門一家もこの建物で今も暮らしている。工房は本家から切り離され、明治（めいじ）時代（1868～1912）に通りをわたった場所に移された。昭和（しょうわ）時代（1926～1989）には車が通れるように大通りが拡張され、2つの建物の距離はさらに広がることになった。今右衛門窯の歴代の職人たちが使用後の筆を洗った水を窓から捨てたため、本家の建物の1階の屋根瓦には赤みがかった色が今でも残っている。

今右衛門古陶磁美術館は、今右衛門窯の隣の近代的な建物である。何世代にもわたって収集されたコレクションには、各代当主それぞれの関心が反映されている。1階には、十三代今右衛門（1926～2001）が収集した17世紀初期の古伊万里（こいまり）の作品が主に展示されている。作品の洗練さは、有田の磁器産業が最盛期だったときに作られたものよりは劣るものの、有田焼の歴史においては重要な工芸品である。

2階には、将軍家への献上品やヨーロッパへの輸出向けに作られた18世紀の作品が展示されている。いずれも十一代今右衛門（1873～1948）と十二代今右衛門（1897～1975）が収集したもので、作品の数々から当時の職人の才能を伺うことができる。3階には、十三代今右衛門が1950年代に個人的に収集した窯跡から出土した窯道具や古陶磁片の重要なコレクションが展示されている。

また3階には、ここ数代の当主たちによる代表的な作品も展示されている。中でも特に目を引くのが、十一代今右衛門が宮内庁向けに作った化粧道具入揃や、東京で開催されることになっており、後に中止されることになった1940年夏季オリンピックから着想を得て十一代今右衛門も作ったという作品である。現当主の十四代今右衛門（1962年生まれ）が作る装飾的な作品も展示されており、雪や雨、梅、稲穂など季節のデザインが特徴となっているものが多い。

今右衛門窯の建物は、有田内山（ありたうちやま）という国の重要伝統的建造物群保存地区の一部となっている。